

第一看護学科

令和6年度一般入学試験問題 小論文

(三の一)

○次の文章を読んで、「癒し音楽」ということについてあなたが考えるところを、六百字以内で具体的に述べなさい（設問の都合上、文章を改変した箇所があります）。

「癒し音楽」という言葉が世間に氾濫しはじめたのはいつごろからなのだろう？ 少なくともかつての昭和バブル・イケイケ時代——若い女性がディスコのお立ち台で群れをなし踊り狂っていたころ——にはこんな言葉を見たこともなかったから、おそらくそれ以後の先行きの見えない不透明で憂鬱な平成の何十年かの間に、いつのまにか「音楽Ⅱ癒し」という連想図式が生まれたものと思われる。「癒しグッズ」とか「ネコ・ブーム」とか、ひよっとすると「アロマ」とか「パワーストーン」とか「パワースポット」の流行と、これはバラレる現象だ。それだけ多くの人々がストレスをためこみ、明るく振る舞いつつも密かに孤立感を深め、しかしその根本原因を必死になって探すとか、状況をラディカルに改善するべく闘うといったことはせず、代わりに当座のうさを晴らしてとりあえずすっきりさせてくれる心のアロマを求めているということか。

しかし一度あらためて問うてみよう。音楽とははたして私たちを癒すためだけにあるものなのだろうか？ 「お菓」なのか？ 音楽イコール癒しと考えていいのか？ 「癒し」以外の音楽の豊饒な可能性を、私たちはどこかに置き忘れてしまっていないか？

私と同じく音楽史を専門とする古い友人が、げんなりした表情で話してくれたエピソードがある。なんでも、あるときテレビ局のディレクターだかプロデューサーだが、番組制作のために「癒し音楽」と「元気が出る音楽」の違いについて専門的に教えてほしいと、彼の研究室を訪ねてきたのだそうだ。友人はそれに対して、音楽は「癒し」と「元気」だけに分類できるような単純なものではないこと、皆が「元気が出る」と感じる音楽を聴いて一人メランコリックな気持ちになる人がいていいし、この多義性こそが音楽の豊かさであるということ、「○○作曲の○○Ⅱ癒される音楽Ⅱその客観的根拠は××」といった単純な「科学的説明」など不可能だということなどを話したという。すると件のディレクター氏は、「こんな要領を得ない話ではテレビ・ネタにならない」と言わんばかりに失望の表情を浮かべ、そのまま帰っていったのだそうだ。「癒し音楽Ⅱ元気が出る音楽」というこの番組企画が実現しなかったことは言うまでもない。

令和6年度一般入学試験問題 小論文

(三〇二)

○×クイズよろしく単純な二分法的ラベル——たとえば「癒し印」と「元気印」など——を貼って、あらゆるものをそのどちらかに分類して回る風潮は、いったいいつごろから始まったのか？ 私がその最初の兆しとして思い浮かべるのは、四十年近く前にタモリが深夜ラジオで流行らせた、「ネクラ／ネアカ」というセットである。そういうえば「癒し／元気が出る」というラベルも「ネクラ／ネアカ」の変奏と見ることができなくもない。

「ネクラな人のための癒しの音楽」、そして「ネアカになりたい人のための元気印の音楽」。いずれにしてもみんな「根」は明るくない。だから音楽を聴いて「たまには暗くなってもいいんだよ」と慰められたり、あるいはなんとか明るいフリをしたりたいということなのだろう。その意味では「元気が出る音楽」とやらもまた、「癒し系音楽」の一変種だ。いずれにしても、こういうものがこれだけ流行するということは、それだけ多くの人が心にストレスを抱え、癒しサプリや元気サプリを求めているということであって、これは相当に深刻な社会的病理の兆候ではある。

(岡田暁生『音楽と出会う——21世紀的つきあい方』世界思想社 二〇一九年)

注 1……レコードやCDのロック音楽などに合わせてダンスを楽しむ店。

2……二つの事柄が相応して存在すること。

3……根本的。

4……気がふさぐ。憂鬱な。